

神學者としてのパウロ

——パウロ神學の意義について

山谷 省 吾

第十九世紀の中葉以來、基督教々理の支配から離脱した純歴史的方法のみによるパウロの研究が次第に深まり行くに従つて、従來の様に、パウロを神學の組織者と見做し、學問的體系としての『パウロ神學』につき云々することに關して、人々は疑惑を挿み、更にその誤謬を感知するに至つた。

パウロを組織神學者と解する見方は、既に古代教會内にて行はれてゐたが、宗教改革後に至つて一層明かに現はれて來た。それは啓示書としての聖書、神と救とについて誤りなき教へを包含せる權威書としての聖書の信仰が確立した結果に外ならない。信仰の内容を組織立て、叙述せんとする時、かゝる必要は宗教改革時代に於て既に感せられてゐた人は自然に『その中に完全な教理を包含する所の』聖書に來た。聖書中最も理論的概念的に構成されてゐるパウロの手紙殊にロマ書に來た。

メランヒトン(Melancthon)もカルヅイン(Calvin)も、各々範をロマ書にとつて基督教の教へを叙述した。此等の最も影響の大きい二人の神學者並に彼等に續く十七世紀の神學者達の眼に、パウロは最初の組織神學者として映じ、組織神學者として尊敬を受けたのである。そして、十七世紀に於て、『教理學』(Dogmatic)が學問的方法を用ゐてプロテスタント主義の信仰内容の組織化に着手し、その結果『聖書神學』(Bibliche Theologie, Theology of the Bible)を獨立せる神學の分科として己れから分離せしめた時『パウロ神學』はその位置をかへて、後者に於て最高の地位を占めるやうになつた。^(二)蓋し、聖書の他の部分の例へば共觀福音書の神學を作り上げんとするのには、非常な無理を敢てしなければ不可能であるのに反し、パウロの手紙から神學思想を引出し、之を組織化するのには、比較的容易な仕事だからである。而して『聖書神學』殊に『新約聖書神學』は、教理學と竝んで教會内で勢力を占むるに至つたので、従つてパウロを以て組織神學者と見、彼の手紙を以て神學の組織を叙述せるものと爲す見解は、これ等の神學の二分科を通じて、一般に行はれて來たのである。我々は十九世紀後半に出たホルステン(Carl Holsten)やフライデラー(Otto Feiderer)の如き最も勝れた近代的なパウロ研究者に於てさへ、かゝる見解の強い影響を認めることが出来る。^(三)

(1) Calvin, Institutes, translated by H. Beveridge, Vol. I, 29.

(2) 宗教改革後の教理學の發達については W. Herrmann, Christlich-protestantische Dogmatik (3), Kultur der Gegenwart 1, IV, 2, 129ff. 參照。新約聖書神學の問題については H. J. Holzmann, Lehrbuch der neutestamentlichen Theologie I, 2, Aufl. 1911, 3ff. Paul Reine, Theologie des N. Ts. 3, Aufl. 1919, 3ff. H. Wemmel, Biblische Theologie des N. Ts. 4, Aufl. 1928 1ff. 參照。

(3) C. Holsten, Das Evangelium des Paulus Teil II, Anhang, Die Gedankengänge der Paulinischen Briefe を見よ。その整然たる思想過程は神學者パウロを物語るに十分であらう。又 Preiderer の Paulinismus 2, Aufl. 1890 も、既にその表題が示してゐるやうに、パウロの思想を立派な組織として見る強い傾向を表はしてゐる。

然るに、かくして成立した『聖書神學』も、いつの間にか、その規範的性質を取去られて、純歴史的な學科となつたのである。蓋、啓蒙思想の下に開始された歴史研究は、從來の如く自ら教理の前提の下に立つことを欲せず、一般歴史の一部分として原始基督教を取扱ひ、聖書に他の文書と同様歴史的研究方法を適用し、言語學的、文獻學的乃至は發生論的批評的立場に立つてその内容を検討し、しかも時と共に愈々微に入り徹底的に之を行つたからである。人は歴史的事實の記述に興味を持ち、人物の性格と業蹟とを好んで語り、聖書の宗教思想の發展と外部よりの影響とを重要視し出した。かゝる見方はパウロを以て啓示の把持者又はその組織者としてではなく、一個の宗教的天才として、福音の使徒として、更に勝れた手紙書きとして見るに至らしめ

た。次いで『聖書神學』なる概念の不當が叫ばれ始め、⁽¹⁾『新約聖書文學』を對象とする所謂『緒論』(Einführung in das Neue Testament, Introduction of the New Testament)の代りに初代基督教文學史をおかんとする試みが爲されるに及んで、⁽¹¹⁾パウロの手紙も古代世界に書かれた手紙の一種と見られ、彼自身も、古代宗教史中の一人物として取扱はれるの止むなきに至つた。且つ他方シュライエル・マッハー以後の組織神學の發達は、自らの方法と特質との反省を促し、引いてはパウロの思想を以て一個の神學組織と見るの誤を自覺せしめた。此等の事情に基いて、前述のやうに、人々は、パウロ神學の意義に就て問ひ始めた。そしてファイネ (Paul Feine) は答へた、⁽¹²⁾パウロは原始基督教中の最大の思想家であり最大の神學者ではあるが、組織家ではないと。蓋、彼は神學と神學組織とを、パウロに於て分ける必要を認めたのである。ダイスマン (Adolf Deissmann) は更に進んで云うた、^(四)従來のパウロ研究では『神學者』としてのパウロ並びにパウロの『神學』に主要點がおかれてゐたが、それは邪道であつて、彼の人物の固有性を、即ち彼の宗教體驗の豫言者的な力と彼の實際的敬虔の勢力とを蔽ひ隠すことになつた。『彼はその本質上先づ第一に信仰の英雄である。神學的なものは第二次的なものである。素朴的なものが彼にあつては反省的なものよりも強く、神祕的なものが

教理的なものよりも強い。キリストは彼にとつてはキリスト論以上であり、神は神観以上である。彼は學者的解釋者と探究的神學者であるよりも遙かに以上に、祈りの人と證あかしし人であり告白者と預言者である』²⁾。

(一) かゝる主張を最も強く表はしてゐるのは W. Bousset, *Kyrios Christos* 2. Aufl. 1921 の序文である。Wainel, *Biblische Theologie des N. Ts.* にもサバタイトルとつて *Die Religion Jesu und des Urchristentums* と記してゐる。

(二) 例へば Marin Dibelius, *Geschichte der uehrchristlichen Literatur* 2 Bde. 1926 参照。

(三) Paul Feing, *Paulus als Theologe* 1905 S. 5-7.

(四) Adolf Deissmann, *Paulus* 2. Aufl. 1926 S. 3-4.

二

問題は『神學』(theologia)なる語の字義にかゝつてをる。もし今日の學者が一般に解するやうに、神學を以て學問の一分科となし、他の文化科學と並べて考察するとすれば、我等はいきほひ學問的自覺眞理への欲求乃至は各個の知識の把握と、その體系化の爲めの方法などを重要視せざるを得なくなる。神學とはかゝる諸要素に満足を與へつゝ爲される所の信仰内容の考察又はその結果創出された體系に外ならぬ^(一)。然しパウロがかゝる意味の神學者でないことは、云ふ迄もない。一般に、哲學的思索の能力を缺いてゐるイスラエル・ユダヤ精神が指導的地位にあつた原始基督教

に於ては、嚴密な意味の神學なるものは存在しなかつた。嚴密なる意味の神學は、少くとも基督教の地盤に於ては、第三世紀の初め希臘哲學の精神に潤ほされその正規な學修を経たアレキサンドリヤの學者オリゲネス (Origenes) に至つて初めて發生したのである。^(二)パウロには學問的精神若しくは自覺と云つたやうなものは見られない。人はその際好んでロマ書を引合に出す。然しロマ書は決して基督教の教への書物ではない。この點に於てカルヅインの *Institutio religionis christianae* とは異つてをる。この改革者にとつては、そこに記されてゐるのは眞の信仰を深める爲めの根本原理であり健全な教へでありキリストについての知識であり、基督教の哲學の主要事項に關する叙述であつた。^(三)然しロマ書は信徒の『堅うせられる爲めの靈の賜物 *kárhoia pneumatikou*』^(二)であり、愚者の體得し智者の耻とする『福音』*euaggelion* ^(一六)であつた。——固よりパウロの手紙の中には、希臘の思想家が好んで用ゐた語があちこちに出てをる。ある時彼は、己れの福音を反對者から防衛する爲めに、『我等は眞理に逆ひて (*katá tḗn sándelias*) 能力なく、眞理の爲めに (*úper tḗn sándelias*) 能力あり』^(コリント後一三ノ八)と云つた。それは恰も希臘の哲學者の口からでも出さうな句である。^(四)然しこゝで云ふ『眞理』とはロゴスの性質たる實在性眞實性若くは誤らざる認識事實に適合した

判断などを指すのではなく、神の意志又はその屬性たる善を指すことが前後の關係から推知される。その他の場所でも *angelica* なる語は屢々使用されてをるが(ロマ書二二五、二ノ一、八、二〇、三ノ七、九ノ一、一五ノ八、前コリント五ノ八、一三ノ六、後コリント四ノ二、六ノ七、七ノ一四、二ノ一〇、一三ノ六、ガラテヤ二ノ五、二ノ一四、五ノ七等)と譯すべきものもあり、そしてその多くは神の啓示又は福音の内容に關係してをり、理性の追求の目標たる『真理』、それ自身として妥當する『真理』と云ふ様な意味は少くとも、表面にあらはれてゐない。^(五) 同じことが同じく屢々用ゐられてをる『智慧』又は『知識』(*σοφία, gnosis*)の二語(ロマ二ノ二〇、一三ノ三三、一五ノ一四、前コリ)については理性によつて獲得される學問的認識ではなく、神の啓示によつて與へられる宗教的信仰的認識である。この世の學者や智者の探索のあなたにあり、只神の靈によつて解明される福音の眞髓又は奧義である(前コリント書二ノ六以下)。それは『希臘人には愚である』(前コリント)所の智慧ならぬ智慧である。パウロは自らが智者や學者や此世の論者ではなく、福音の宣傳者であることを、誇を以て宣言して居る(七ノ一〇)。

(1) Paul Wernle, Einführung in das theologische Studium 3. Aufl. 1921 S. 1-12. 猶石原謙氏『神學史』(岩波哲學講座)三一〇頁參照。

(11) „Er hat das einzig christlich-dogmatische System hervorgebracht, welches die griechische Kirche vor Johannes Damaskus be sessen hat.“ „Er ist der Vater der kirchlichen Wissenschaft im weitesten Sinne des Wortes.“ „Origenes hat die 神學者としてのパウロ——パウロ神學の意義について

kirchliche Dogmatik geschaffen“ (Adolf von Harnack, Lehrbuch der Dogmengeschichte I. 5, Aufl. 1931 S. 637, 650), „Er ist ein methodisch-forschender Gelehrter, Er ist der Schöpfer der Dogmatik der griechischen Kirche geworden.“ (Fr. Löffel, Dogmengeschichte 4, Aufl. 1905, S. 191). „Er ist der erste, der bewusst auf dem Boden der kirchlichen Tradition und der heiligen Schrift ein umfassendes philosophisch-theologisches System aufgebaut“ (R. Seeberg, Lehrbuch der Dogmengeschichte I. 5, Aufl. 1922, S. 500, 501).

(三) Calvin, Institutes, Ibd. p. 29-30.

(四) H. Windisch, Der zweite Korintherbrief (Meyer's Kommentar VI.) 1924 S. 424には希臘の著者からの引用が出てゐる。

(五) G. Kittel, Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament 1924 SS. 233-248 参照。但私見によれば筆者 Bultmann は *ἀναστα* を餘りに希臘的に解し過ぎてゐる。猶ほ前掲 P. Reine, *Theologie des N. Ts.* S. 935I 参照。

(六) 拙著『新約聖書・新譯と解釋』1、(2)三〇一三七頁、四五―五〇頁参照。

實際、パウロの手紙に現はれて來る彼は、福音宣傳者、神の使徒、『新約の役者』(後三ノ六)たる彼であつて、神學者たる彼ではない。彼は己れの使徒職の神から來つてをること、神は既に母の胎内から彼を選び別つてこの仕事に定めたことについて、不動の確信を抱いてゐた(ロマ書一ノ一、前コリント書一)。そしてこの確信は彼の人格の全體を貫き、凡ての部分に漲り溢れてゐた。もし彼からこの確信を取除いたならば、何が残るだらうか。『我は福音を耻とせず。』『我は希臘人にも夷人にも、智き者にも愚なる者にも負債あり』(ロマ書二ノ一六、二四)。「我れ福音を宣べ傳ふとも誇るべき所なし、已むを得ざるなり。

もし福音を宣へ傳へずば、我は禍害なるかな『コリント前』(コリント前九ノ一六)。『我は使徒にあらずや』『阿ノ一』(テサロニケ前書二ノ九)。彼は福音宣傳の爲めに日夜勞し『テサロニケ前書二ノ九』、キリストの爲めに縲綽を受け『ピリヒ書一ノ二三』(ピリモン書一三)。身を以てキリストの患難の缺けたのを補つた『コロサイ書』(一ノ二四)。我々はかゝる類の言葉を、彼の手紙の至る所で發見することが出来る『ロマ書一五ノ一』(四一―二一参照)。これ等の彼の自覺を中心としてこそ、パウロの正しい理解は成立するのである。理論家のパウロではなく實際家のパウロが、眞の彼である。彼の興味は神學の組織を作り上げることではなく、人の靈魂をキリストに於て捉へることにあつた。もし彼に向つて『汝は誰ぞや』と尋ねるならば、彼はたち所に、『我はイエスキリストの使徒』と答へたであらう。

パウロが手紙を書いた時、彼は普遍的な眞理を多くの人々に示して彼等に誤らない學問的認識を與へやうと云ふ意圖を持つてゐなかつた。時と場所との制限を越えて未知の多數の讀者に影響を與へ彼等を眞理に導く所の思想、そのものについて、彼は恐らく考へたことがなかつたであらう。彼が手紙を書いたのは、全く實際的な必要からであつた。即ち福音宣傳者たる彼は、同時に教會(church)の設立者でありその維持者であつた。彼の努力の大半は教會の爲めに捧げられた。パウロの設立した教會は『異邦人教會』であつて、その會員を基督教の信仰と生活とに徹底させ訓

練させることだけでも非常な苦心であつたが、なほその上に外部から来る猶太人や猶太人基督教徒や更に周圍の希臘人からの非難や攻撃や迫害から教會と福音とを防衛し強固なる團體とせねばならなかつた(一ノ二九參照)。即ち問題は學校の問題、學問上の問題ではなく、福音の死活に關係せる實際上の問題であつた。この諸問題を解決する爲めに、彼は手紙を書いたのである。従つてその内容は極めて複雑であり多面的であつて、そこに組織や體系を求めるとは出来ない。時としては思想の統一が破れ、前後の文脈がたゞれ、且つ文章の體裁さへ整つてゐないことがある。眼前に迫り來つてをる出來事が、彼を動かしてそれに適應した處置を講せしめ、文書によつてそれを相手に知らせたのである。故にそれは文學的の作品ではなく、時々の機會に書かれた手紙である。(一) ロマ書の如く秩序立つた文書であつても、この特質を失つてはゐない。即ちパウロが手紙を書いた時、彼は後代の讀者未知の讀者を豫想して書いたのではなく、従つて彼の手紙は、古代世界に於て屢々見受けられる文學的書翰(二)とは全くその類を異にして居る。むしろ我々は、バビルスの紙片や陶器オスト、ラカの破片に書き記された私信との類似を承認しなければならぬ。發信者と受信者との個人的な親しい關係を前提し、それに對する知識なくしては内容の十分な理解が不能で

あるパウロの手紙の中に、學問的な神學の組織を見やうとするのは、だから本來無理な仕事である。(三)

(一) パウロの手紙が非文學的な時々必要に應じて書かれた『私信』であることは、長い間多くの學者によつて注意されてゐたが、所謂「Gelegenheitsbriefe」として、最近特に、文學的な書翰と對立させて、この性質を主張したのは、A. Deissmann である。A. Deissmann, *Licht vom Osten*, 4. Aufl. 1923 S. 194-206. Paulus, eine kultur- und religionsgeschichtliche Skizze 2. Aufl. 1925 S. 6-14. 彼の主張は、先驅者に常に見る極端性を伴つて居るが、全體として見て勿論正しい。彼は一を Briefe 他を Epistel と呼んでゐる。『手紙を祕密とすれば書翰は商品である。』『手紙は生の一部であり書翰は文學術の創造である。』『多くの手紙は受信者と著者との地位を知らないでは全くは理解出来ないが、然し書翰の方は兩者を知らないで理解が出来る。』(*Licht vom Osten* S. 195) 猶ほハルナックによればエウゼビウスの教會史二六・二には『手紙の體裁をとる論文』*ἄγιοι ἐν ἐπιστολῶν γὰρ ἀξία γινώσκοντες* なる文字が出てゐる(上掲書同一頁脚註參照)。

(二) *Δαϊσκυλλίων* はその例として *Diogenes von Heliopolis*, *Plutarchos*, *L. Aeneas Seneca*, *der jüngere Plinius*, *Lucilius*, *Horatius*, *Ovidius*, を挙げて居る(上掲書一九七—一九八頁)。

(三) パウロの手紙の全體の性質については、拙著『新約聖書・新譯と解釋』I(一)一五—二二頁參照。

そして假令パウロが文學的な書翰を書くことが出来、その中に永遠に妥當する眞理の組織を論述し得たとしても、彼はそれをしなかつたらう。何となれば、彼はこの世界がこの儘の形で永存すると信じなかつたからである。彼にとつては、世の終末は近づき、キリストの來臨は目睫の間に迫つてゐる。『兄弟よ、われ之を言はん時は縮れり。されば此より後妻を有てる者は有たぬが如く、泣く者は泣かぬが如く、喜ぶ

者は喜ばぬが如く、買ふ者は有たぬが如く、世を用ふる者は用る盡さぬ如くすべし。此の世の状態は過行くべければなり〔コリント前書七二九―三二〕。だから後世を裨益する神學的著作を遺すと云ふ如き企ては、彼にとつては妻を娶つたり買物をしたりする以上に無意義であつた。彼の心は、終末の出來事と並にそれと直接に關係のある靈魂の救済とで占領されてゐた。そして一度キリストの日となつた後は、『豫言はすたれ、異言は止み、知識もまた廢るだらう』〔コリント前書一三ノ一〇〕。その時は臆氣でなく『顔を對せて相見』〔我が知られたる如く全く知るであらう〕〔同三ノ二〕。推理によらず直觀によつて凡てを知る爲めに、必要なる準備を得させること、即ち福音を宣傳して人々に信仰を引起させること、これこそ今の時が、パウロに期待してをる唯一の緊要事である。

三

故に我々は、前時代の人が好んでした様に、パウロを組織神學者と見、彼のロマ書を纏め上げられた教理の教科書として取扱ふことは、もはや出來ない。又彼の手紙の中に一貫した教への原理と統一した體系とを豫想しつゝ、煩瑣な方法を用ゐてその各概念や言語を比較して或は區別し或は關係づけ、殊更に牽強附會な説明を試みる如きことをも、警戒して避けねばならない。パウロの教へを理解せんとする者は、先

づこの事を知つておく必要がある。

しかも猶ほ我々は、『パウロの宗教』なる語だけでは満足し得ないで、『パウロの神學』なる語を用ゐる。そしてそれは、彼の基督教史に於ける地位を定める場合にも、又彼の手紙の内容を検討する場合にも、止むを得ないのである。

パウロの手紙の中に神學的なものが極めて多量に存在してゐること、否彼の作物の大部分が彼の神學的思想によつて貫かれ活かされてゐることは、争はれない事實である。パウロを神學者となす在來の解釋に強く反對して立つたダイスマンでさへも、そこに第二次的には神學的なものの存在する事實を認めて居る。⁽¹⁾が彼のように低くそれを評價したのでは、パウロの全貌を恐ろしく歪める結果に陥る。試みに、彼をして他の諸傳道者と異らしめる者は何であつたかと尋ねて見やう。云ふ迄もなく、それは彼の大仕掛な世界傳道即ち異邦人傳道であつたであらう。彼自身も誇りがに自らについて『熟練なる建築師のごとく』教會の基を据ゑ、そして『他の人はその上に建てる』と云ひ^(コリント前書三三ノ一〇)更に『凡ての使徒よりも我は多く働けり』と云つて居る^(同二五ノ一〇)。彼がアンチオケの教會から派遣されてクプロの島に出發した時から羅馬で殉教の死を遂げる迄の約十年間に、羅馬帝國內の基督教の情勢は一變を來して

をるが、それは主として彼の活動の賜物である。然し乍ら彼と並んで多くの福音宣傳者がゐたこと、異邦人傳道はパウロ以前に既に開始され、アンチオケ、アレキサンドリヤ、ロマの如き有力な教會は彼の設立にかゝつてゐないことなども、同時に考へねばならない。すると異邦人傳道は彼の獨特の働きでないことになる。然し彼の神學的思想はさうではない。全體として見て、それは、彼獨特なものである。すでにパウロの傳道の成功そのものが、その背後にある福音の本質の的確な把握に負ふ所、極めて大であつたのである。勿論彼の多くの仲間にとつても福音は新しい力であつたが、彼等はその何故であるか又如何なる點が新しいかと云ふ根本問題を原理的思想的に解決し得ず、従つて例へば律法問題が引起され猶太人の宗教に對して最後の態度をとる必要に迫られた時、彼等はその前に躊躇せざるを得なかつた。然るにパウロのみは對決策を持つてゐた。彼は自己の回心の意義を考察し、新宗教の新原理をしかとつきとめ、しかも明快な語をもつて表出し、人々にそれを傳へ、又人と論戰することが出來た。即ち彼は『何人にも先だつて深き體驗と鋭き洞察とを以て、新しき世界的人類的宗教としての基督教の本質を、明瞭に的確に捉へ又述べ得た。』^(二)そしてその述べられたものは、彼の神學でなくて何であらう。エルサレム教會の人々の持

つてゐた『神學まがひ』のものから遙に進んだ神學を彼は創造し所有し、それによつて教會のあらゆる問題を解決した。彼の宗教の特徴はそれが神學と密接に結合してゐた點であつた。かゝる意味に於て我々はパウロを以て基督教最初の神學者と見るのである。^(三)

(一) 前出、第四二頁參照。

(二) 波多野精一氏『パウロ』第九頁、岩波『世界思潮』(第一冊)

(三) かゝる見解がむしろ今日の通説である。私はこゝでは只前書フアイネの外に Johannes Weiss と William Wrede とをあげておかう。J. Weiss, Das Uchristentum 1917 S. 230-322. そこで彼はパウロをば、『神學的思想家』Theologischer Denk(er)と呼んでゐる。W. Wrede, Paulus 2. Aufl. 1907. S. 47-48 『パウロ自身の宗教は、全く神學的であり、彼の神學は彼の宗教である。彼に於て問題となるのは冷やかな、理解力によつて捉へられる、謂はゞ敬虔のあなたに漂ふて居る教理とする考へが間違つて居る様に、パウロの敬虔を、それによつて彼がキリストとその死とその復活とを把握した思想なしに叙述し得るとする考へも間違つて居る。』猶ほ上述石原謙氏『神學史』二二—一六頁參照。

このことは、パウロの手紙の内容に一瞥を與へる者の直ちに首肯する所である。私はイエスの宗教と比較しつゝ之を試みやう。イエスは單純な清明な宗教の世界に住んでゐた。彼は自己の周圍にひろがつて居る自然とその中に活動せる人物とを神の光の下に直觀し、萬物に注ぐ神の恩恵を喜びつゝ感謝しつゝ無邪氣に受け入れて生活し、そして美しい語を以て體驗したまゝを表出した。彼の教へには堅い理

論めいたものは見出し難く、その短い言葉や比喩は勿論、反對者への攻撃も又民衆への警告も、豫言者の直截と簡勁とを持つてをる。^(一)然るにパウロに來ると、我々は全く變つた世界に入るのを感じる。勿論、彼にも豫言者の一面はあつたし、事物の本質を鋭く觀る眼を持つてゐた。^(二)が彼は同時に理論の人であつた。自己の所信を披瀝し論述する時、彼は當時の世界に廣く行はれてゐた思想や概念を用ゐ、一の前提から他の歸結を引出し、一の原理を個々の場合へと適用した。^(三)彼は辯論の術に長け、敵を論駁し相手を説得する驚くべき手腕を持つてゐた。彼は辯證法を巧に利用し、一の概念から他の對立概念へ、一の論定から他の論定へ移り行き、順次に思想を展開させた。^(四)彼の内には、ある原理と目的とが主座を占め、凡てをそれと結びつけ、凡てをそれに導き返した。彼の手紙の中には不自然とか、附會とか云ふ印象を興へる部分が少くないのは、之が爲めである。要するに彼の宗教は概念的・思想的に表出されて居つて、理性に訴へつゝ人を説得させねば止まぬ種類のものである。如何なる體驗も、之を思想の形式に於て語り、且つ語り得る迄は満足しなかつた様に見える。彼は神學者としての自覺を持つてゐたのではないが、然もなほ前にも云つた様に、自己の福音の意義を考へ、之を在來の宗教と關係させつゝ、その獨自性を把握し、そしてその行くべき

道を認識することが出来た。それは思想家でなくては到底不可能である。故に基督教の思想史・神學史を書く人がパウロから之を始めるのは、當然だと云はねばならない。基督教最初の神學者はたしかに、パウロその人に外ならなかつた。

(一) イエスも律法學者即ち *νομικός* の方法を用ゐて相手と議論をした場合もある。彼の活動は教師として又醫者としての活動であつて、周囲の人々にはラビの一人と見られてゐた。彼の律法解釋の例は、マルコ傳一〇ノ一一、一一ノ二七―三三、一ノ一八―二七、等に見られる。が、それ等は例外的である。

(二) 彼の時々に見出した格言的な言葉の例として次の如きものを挙げる事が出来やう。

『儀文は殺し靈は活かす』(コリント後書三ノ六)。

『猶太人は徴を乞ひ、希臘人は智慧を求む』(コリント前書一ノ二二)。

『知識は人を誇らしめ愛は徳を建つ』(同 八ノ一)。

『我等の知識全からず』(Stückwerk ist unser Erkennen) (同 一三ノ九)。

『我等は見ゆる所によらず、信仰によりて歩む』(後書五ノ七)。

『最早我生けるに非ずキリスト我にあつて生く』(ガラテヤ書二ノ二〇)。

(三) 例へばガラテヤ書三ノ七―一四、一五―一八。コリント前書二五ノ二九―三二、三五―四九。ロマ書五ノ二二―二二等。

(四) コリント後書四ノ七―一二。六ノ三―一〇、前書一ノ一八―二五、等参照。

パウロが神學者となることは、彼の生ひ立ちが之を定めた。彼は小亞細亞の東南に位するキリキア州の首都タルソスに地位の卑からざる猶太人の子として生れ成長した。⁽¹⁾ タルソスが當時アテナイやアレキサンドリヤと並んでヘレニズム文化の隆

盛地であつた事は、周知の事實である。そこには有名なストアの學校もあつたし、又名ある哲人をも出して居る。且そこは東洋の密儀教の一中心地であつた。従つて若いパウロは希臘語を通じて、又周圍の世界との交通により、希臘文化や東洋の神秘思想の影響を、多かれ少かれ、受けたに相違ない。彼の手紙の用語を通じ、又その思想を通じて、彼がバステイナの田舎育ちであるイエスの直弟子達と類を異にする高い教養の都會人であることを知り得る。^(二) 又密儀教との關係も問題となる。が、それにも優つて彼の神學思想に重大な影響を與へたのは、パウロの家庭が熱心な猶太教信徒であつたことである。彼はそこで、各パリサイ人の家としてゐた様に、舊約聖書（彼の場合にはその希臘語譯、即ち『七十人譯』を教へられその精神に養はれたらう。そして長ずるに及んでエルサレムに上り、有名なラビ・ガマリエル (Gamaliel) について律法を根本的に學習し、猶太神學の方法を會得することが出來た。^(三) 即ち彼は基督教に來る前に、既に立派な猶太教の神學者であつた。そしてイエスの福音に理論的の衣を着せる必要を感じた時、そして殊にそれを異邦人に宣傳せんとした時、この猶太教の神學者は、希臘の概念や思想を自在に驅使し得る異邦人基督教の神學者となつたのである。

(一) パウロの生地がタルソスであることは使徒行傳二二ノ三から知られるが(同九ノ一一、二二ノ三九參照)、然しタルソスではなくパレスティナであらうと云ふ説がある。それはヒエロニムス(Hieronymus, *Kommentar zu Philemon 28*)から發して居る。即ちそこではパウロの兩親は北ガリラヤの Gischla の出であると記してある。此説を否認する根據は存在しない。従つてパウロはパレスティナに生れ、幼少の時、兩親に伴はれてタルソスに來たのかも知れない。然し少くともタルソで育つたことは、確かである。

(二) 屢々注意される様にパウロの手紙の中には『良心の告白』『自由 Gewisse』等ストアの用語が使はれて居る。

(三) パウロがエルサレムに上つてガマリエル門下で律法を學んだと云ふことは、使徒行傳二二ノ三によつて知られる(なほ五ノ三四參照)。そしてそれは彼自身熱心に律法を研究し僻董を抜んで、律法に進んだと云ふガラテヤ書一ノ一四の記述とも調和して居る(なほヒリビ書三ノ五―六參照)。然るに最近に至り、パウロのエルサレムに於ける修學をいたく疑ふ學者が生じた。例へば Bultmann, *Paulus (Religion in Geschichte und Gegenwart 2. Aufl. 4. Bd. 1090-1021)*、ナルトマンは、パウロは回心前エルサレムには殆んど行かなかつたからと云ふ斷定を下し、その根據をガラテヤ書一ノ二二『キリストにあるユダヤの教會は我が顔を知らざりし……』に求めて居る。この節が上述使徒行傳の記述と矛盾することは既に Mommsen の主張した所であつたが (*Zeitschrift für neutestamentl. Wissenschaft. 1901, S. 85*)、最近パウロに於ける猶太主義的要素を出来る丈輕小に見、希臘主義的要素を過重視する『宗教史學派』に至つて、再び注目され出した。本文の解釋としては、この『ユダヤの諸教會』の中には、エルサレム教會を包含するものと見るのが正しい。(拙著『新約聖書』I (1) 一五一頁參照)。然しそこからエルサレム教會の中に猶太教時代のパウロを知れる者が一人もなかつたとの結論は引出せない。ガラテヤ書を書いて居るパウロ、エルサレム教會との關係を出来る丈少く見んとせるパウロは、回心前に迫害の際に彼の顔を知れる信徒のある者が現在エルサレム教會にゐたとしても、それを看過したであらう。パウロは正確に少しの間違もない様に、常に語ることは出来なかつた。リーツマン『古代教會史』第一卷一〇三頁參照。

四

パウロ神學の大なる意義は、それが及ぼした後世への影響によつて知られる。エデュアード・シュワルツ(Eduard Schwartz)は嘗て『世界史的に偉大であつたのは使徒パウロではなく、記者パウロである』と云つた。⁽¹⁾この『記者パウロ』に代へるに『神學者パウロ』を以てしても差支ないだらう。けれど、パウロの記した手紙は、その中に勝れた獨創的な神學思想を盛られそれによつて貫かれて居るが故に、後の人々を支配し得たからである。この勝れた獨創的な神學思想に感動したからこそ、彼等はパウロの手紙の書かれた本來の目的に反してそれ等を集成し保存し、聖日毎に禮拜の儀式に朗讀し、つひに新約聖書の一部として尊重するに至つたのである。

(1) Ed. Schwartz, Charakterköpfe aus der Antikenliteratur 2, Reihe 122.

我々は今こゝで、基督教思想史に於けるパウロ神學について詳述すべきではないが、大體に於て前者は後者の基礎の上に開展されてゐると云ふことが出來やう。パウロの直後、師の精神を最も深く呼吸してゐた偉大なる一弟子の筆に成つたと推定されるエペソ書は云ふ迄もないが、⁽²⁾ヘブライ書、ペテロ前書等新約聖書に取入れられてゐる異邦人基督教の地盤に於て成立した勝れた文書も、パウロの思想と神學とを

前提として初めて理解することが出来る。キリストの苦難と死の意義、凡てのものの上に位するキリストの權威、眞の祭司としてのキリスト、基督教的信仰の評價並びにキリストの信仰による救と新生、等、もとより著者の獨特な體驗とその思想傾向によつて異なる表出を持つては居るが、大體に於てパウロ神學の繼承と發展と云つて差支ない。それのみではなく、初期カトリク教會の成立に貢獻する所の多かつた二種類の文書、即ち道德的敎訓と舊約的律法とによつて織り成されてをるクレメント第一の書翰並に教會の組織と管理とを問題の中心としてをる所謂牧者書翰(テモテ前後書とテトス書)の中に於ても、パウロの影響は著しい。更に我々はイグナチウスの諸書翰に於けるパウロの影響を見逃す譯には行かない。その中には著者の強い性格と又特有な思想の發展並に強調はあるが、パウロ神學の印銘は極めて鮮かである。例へばキリスト論(彼はパウロより進んで、牧者書翰に於けると同じくキリストを『神』と呼んでをる)救濟論、並びに聖餐論に於て、しかのみならず、殉敎の死を願ふその心情に於てまでパウロ的である。そして同一のことがヨハネ文書に於ても云へる。この後の教會に深い感化を殘した文書、神祕主義的傾向を多分に帶びた調子の高い、一見パウロの神學から離れてをる様に見える文書に於ても、その根柢に横はる

信仰と神學とは等しくパウロのそれである。例へばキリストを以て『ロゴス』神の子『世界の救主』となす點に於て、その福音が信仰と恩恵とのそれである點に於て、その光と暗靈と肉律法と信仰行爲と恩恵の對立に於て、加之聖靈觀に於ても我々はパウロの顯著なる影響を認めることが出来る。『たとひ使徒後エビゾーネンの時代に於てもその偉大なる師パウロを正しく理解した者が一人もなかつたとしても、こゝに一人の人があつて、彼は同様な權能を以てパウロの思想の世界的の廣さと宗教的の深さとを把握し、そして彼の激烈な情熱を淨福な神との契合に榮化した』^(二)『リーマンン』。パウロがヨハネに影響した時、パウロ神學はその作用の最大なるものの一つを爲し遂げたのである。

新約時代も過ぎ、基督教會が希臘思想からの直接の影響の下に立つやうになつて、パウロ神學はその眞髓に於てはもはや理解されなくなつたとしても、依然として神學思想の基礎を爲し、又思索の據所となつた。ユスティヌス(Justinus)にしても、アイレナイウス(Irenaeus)にしてもオリゲネス(Origenes)にしても、パウロの定めた方向に従ひ、又彼の道を踏んで己れの思想を開展させたと云つて差支なからう。殊にパウロ神學の祖述を以て唯一の任務とし最初に彼の手紙の集成を爲した自覺せるパウロ主

義者マルキオン (Marcion) の如き人が、第二世紀に存在してゐたことを知らねばならない。實際パウロの神學は、第二世紀以後現今に迄引き續いてをる基督教神學並に基督教々理の基礎を作つてをる。中世のロマ・カトリク教會の精神的、思想的指導者たるアウグステイヌスも、又その教會に反對して立つたルツターも、又カルヴィンも、パウロの影響の下にその神學を築き上げたのである。殊に顯著なのは、所謂『體驗神學』(Theologie von Innen) たるその特質が、之等の偉大なる人々の神學にあらはれてをる點である。そして既に述べた様に、パウロ神學はメランヒトンやカルヴィンの神學書を通じて旺んなるプロテスタントの神學研究に働きかけ、かくして最近のバルト神學に迄及んで居る。即ち我々は、教會史を通じて働いて居る主要なる理念も人格も、基督教を抽象的思想的に表はす神學も、教理も並びに具體的、實際的に示す數多の人物も、多かれ少なかれ、パウロ神學に負ふて居るのを見る。かくパウロがその神學によつて後の世界に生きてをる事實を知る時、彼の神學が彼にとつて決して、ダイスマンなどの云ふ様に、第二次的の意義しか持たぬものではなく、却つてその反對に、彼の世界的意義は、勿論他にも要素はあるけれど、彼の神學によつて定められてをるものと斷定し得るだらう。

(三)

(一) エヘツ書が果してパウロ自身から出て居るか、或は彼の忠實な勝れたある一人の弟子の筆に成つたかと云ふ問題は、今に至るまで學者の決定しかれて居る難問である。最近のパウロの手紙の眞偽に關する批評は、次第に穩健となり、従つて古來の傳承に歸らんとする傾向がある。かくしてコロサイ書は今では殆んど一般的に、パウロの作と認められるに至つた。然しエヘツ書はコロサイ書と密接に關係して居るにもかゝらず(何れも『幽囚書翰』に屬すること、その内容の類似、その宛先教會の近接等、殊にコロサイ書四ノ一六、參照)、パウロ自身から出たと見ることの出来ない諸要素を包含して居る。最近の研究の大勢も、パウロの眞作であることを拒否して居る。その詳細は Martin Dibelius, *An die Epheser*, (Handbuch zum N. Ts. 12, 2. Aufl. S. 47, 63-65, 69) 參照。H. Lietzmann の *Nene Testament Deutsch*, 8. に含まれて居る Heinrich Rendtorff は、エヘツ書をパウロの作と見、書中に見える如き雄大な思想は、パウロの後繼者には迎も期待出来ないといふ(居る(S. 44)。

(二) Lietzmann, *Ibid.* S. 250. 一般にパウロ神學が以上の諸文書に及ぼした影響についても、同書二〇〇—二六四頁、並びに O. Pfeiderer, *Der Paulinismus*, 293-331 參照。

(三) マイスヤンが一九二三年英國で試みた講演 *The Religion of Jesus and the Faith of Paul* の中に、第一世紀から第二世紀にかけてパウロは教會で理解されなかつたと云ふが、それはパウロ神學を不當に重要視した誤れる態度から生ずる結論に過ぎない。もしパウロの神祕思想『キリストとの交り』を中心として見、彼の非文學的な手紙を中心として見れば、パウロの影響は甚だ積極的になると主張して居る(佐野勝也譯『イエスとパウロ』三〇三頁以下、なほ一五七—一六四頁參照)、『第十九世紀において、西洋の多くの人々が、自分はパウロを理解したと思つたが、多くの者は彼を誤解してゐる』(同書一六三頁)。